

2026年度 第5回（10月）北辰テスト対策 予想問題【B版】 解答・解説

国語

1 問1（4点）

イ

①の直後の段落に「タイムはほとんど同じ」「選ばれたのは僕で、悠斗は補欠だった」とある。

・僕は、うれしさより先に、同じ力なのに選ばれなかった悠斗のことを思い、素直に喜べずにいる → イ が適切。

・ア「不満」は本文にない。ウ「予想どおり」も誤り。エ「あきらめ」は僕ではなく悠斗の側の話。

1 問2（4点）

ウ

②の直前に「悠斗が給水の用意をしてくれる」「ストップウォッチも持っていた」「ありがたくて、同時に」とある。

・本来なら走者になれたはずの悠斗に世話をされることが、ありがたい反面、申し訳なく、後ろめたい → ウ。

・ア「うっとうしい」、イ「疑っている」は本文と逆。エ「うらやましい」は立場が逆。

1 問3（6点）

(例) 悠斗は自分を心配して止めたのであり、その支えが自分を走らせてくれている (35字)

正答例:

・(例1) 悠斗は自分を心配して止めたのであり、その支えが自分を走らせてくれている (35字)

・(例2) 悠斗の支えがあって自分は走れるのだと、悠斗が自分を走らせてくれている (34字)

③の直後「僕は、悠斗に選ばれたわけではない。でも、悠斗が僕を走らせてくれているのだと、初めて思った」が根拠。「後ろめたさ」が「支えへの気づき」に変わった。

採点: 指定語2語（各1点）、「悠斗の支え／心配」という内容（2点）、「自分を走らせてくれている」という気づき（2点）。字数外は0点。

1 問4（4点）

ア

④の直前「沿道から悠斗の声が聞こえた」「何を言っているのかは聞き取れなかった」「それでも」に注目。

・言葉は聞こえなくても、悠斗の思いは受け取っている。だから迷わず走れた → ア。

・イ「聞こえないふり」、ウ「不安」、エ「悠斗を意識しないように」はいずれも本文の流れと合わない。

1 問5（5点）

エ

⑤の直前「来年は悠斗が走るのだと」と、二人が「何も言わなかった」という描写に注目。

・言葉にしなくても通じ合う関係になり、今年は自分が、来年は悠斗が走る、という確信をもっている → エ。

・ア「勝てた」は本文に記述がない。イ「引退」も不明。ウ「悠斗に走者を譲るべきだった」は後悔で、⑤の前向きな確信と合わない。

1 問6 (5点)

イ・オ

- ・ア: 「のどに小さな骨がひっかかった」→「すつと落ちていった」の対応で心情の変化が表現されている → 適切
 - ・イ: 本文は「僕」の視点で語られており、悠斗の心情は言動から読み取る形 → 不適切
 - ・ウ: 冒頭の「冷たく届いた」空気、大会当日の「風の音」など、季節や情景が場面を支えている → 適切
 - ・エ: 「大丈夫か。無理するな。」など短い会話文が緊張感を生んでいる → 適切
 - ・オ: 回想が中心ではなく、大会二週間前から当日までが時間順に描かれている → 不適切
- 完答で5点。

2 問1(1) (2点)

ゆる

緩やか＝ゆるやか。傾きや変化がゆっくりしているさま。

採点ポイント: 送りがな「やか」を除いた「ゆる」が答え。「かん」と音読みしない。

2 問1(2) (2点)

うるお

潤う＝うるおう。水分をふくむ、豊かになる。

採点ポイント: 「潤（じゅん）」の訓読み。

2 問1(3) (2点)

専門

専門。「専」の右上に点を打たない、「門」を「問」としない。

採点ポイント: 「専門」「専門」の書き分け。

2 問1(4) (2点)

傾向

傾向＝物事がある方向にかたむいていくこと。

採点ポイント: 「傾」のつくりは「頃」。「係向」「経向」は誤り。

2 問2(1) (2点)

イ

「鑑賞」の「鑑」。

- ・ア 「監視」(監)、イ 「図鑑」(鑑)、ウ 「簡単」(簡)、エ 「関心」(関)。

採点ポイント: 「観賞」(植物などを見て楽しむ)との使い分けも問われやすい。

2 問2(2) (2点)

ウ

「開店」の「開」。

- ・ア 「機械」(械)、イ 「快晴」(快)、ウ 「開始」(開)、エ 「解決」(解)。

2 問3 (3点)

ア・ウ・エ

形容動詞は、言い切りの形が「～だ」になり、活用する。

- ・ア 「静かな」→ 静かだ → 形容動詞 ✓
- ・イ 「大きな」→ 「大きだ」とは言えない。活用しない**連体詞**（「大きい」は形容詞だが「大きな」は別の語）
- ・ウ 「きれいに」→ きれいだ → 形容動詞の連用形 ✓
- ・エ 「おだやかな」→ おだやかだ → 形容動詞 ✓
- ・オ 「はっきり」→ 活用せず用言を修飾する**副詞**
- ・カ 「この」→ 活用せず体言を修飾する**連体詞**

完答で3点。「大きな」を形容動詞と誤るのが最多。

2 問4 (3点)

ウ

- ・ア 「走り」＝「走る」の連用形（動詞）。「走り出す」の一部。
- ・イ 「静かに」＝形容動詞「静かだ」の連用形。
- ・ウ 「走り」＝「走ること」の意味で、「～が」をつけて主語になれる**名詞**（転成名詞）✓
- ・エ 「かなり」＝副詞。

採点ポイント: 同じ「走り」でも、主語になれる（「が」をつけられる）なら名詞。

2 問5 (3点)

ア

慣用句の空欄補充。

- ・「首を長くする」＝待ち遠しく思っ待つ ✓
- ・イ「手を焼く」＝扱いに困る、ウ「目を疑う」＝信じられない、エ「肩を落とす」＝がっかりする。

採点ポイント: 体の部分を使った慣用句は意味とセットで覚える。

2 問6(1) (3点)

エ

司会の役割は、出た意見を整理し、議論を進めること。

- ・直前で B・C の提案を要約しており、直後に「ほかに意見はありますか」と続く。
- ・エ「どちらもアンケートの結果に対応した提案ですね」は、二つの意見を根拠（アンケート）と結びつけて整理している ✓
- ・ア は司会が一方の意見に賛成してしまっており中立でない。イ は話題を変えている。ウ は意見を否定しており、議論を進める役割に反する。

2 問6(2) (2点)

ウ

Dさんは「Bさんの意見に付け加えます」と、だれの意見に対する発言かを明らかにしてから、「生徒が書いたカード」という具体的な方法と「同じ中学生の目線で選べる」という理由を述べている → ウ。

- ・ア「反対」、イ「新しい話題」、エ「多数決」は本文と合わない。

2 問6(3) (2点)

イ

空欄Ⅱは司会が「出た意見をまとめ」た内容で、「二つの方向」とある。

- ・出た意見は、B・Dの「本を紹介するコーナー（本の選び方）」とCの「朝の開館（開館時間）」の二つ → イ。
- ・アは一方のみ、ウ・エは話し合いに出ていない内容。

3 問1 (4点)

ウ

①以降の段落で、「わかりやすい言葉」＝「すでにできあがった言葉」であり、「目の前の相手のためだけに選ばれた言葉ではない」と述べている。

- ・見落とし＝わかりやすさを優先すると、目の前の相手に向けて言葉を選ぶことがおろそかになる → ウ。
- ・アは「わかりやすさが大切」とする筆者の前提と合うが「見落とし」ではない。イ・エは本文にない。

3 問2 (4点)

ア

②の直前「だれにでも当てはまる言葉は、裏を返せば」に注目。

- ・決まり文句はだれにでも当てはまる＝特定の相手に向けて選ばれたものではない → ア。
- ・イ「意味が伝わらない」、ウ「古い」、エ「聞き手が理解できない」は本文の論点とずれる。

3 問3 (6点)

(例) 目の前の相手のために、その場で言葉を探し、ときに詰まりながら話す (32字)

正答例:

- ・(例1) 目の前の相手のために、その場で言葉を探し、ときに詰まりながら話す (32字)
- ・(例2) 相手に合う言葉をその場で探し、言葉に詰まりながらも伝えようとする (32字)

③のある段落「相手のためにその場で言葉を探し、ときに詰まりながらたどり着く、遅いわかりやすさ」が根拠。

採点: 指定語2語 (各1点)、「その場で言葉を探す」(2点)、「相手のために／詰まりながら」(2点)。

3 問4 (4点)

イ

④の直後「その沈黙は『あなたの話を受け止めている』というメッセージになりうる」が説明。

- ・すぐに言葉を返さないことが、相手の話を受け止めているというメッセージを伝える → イ。
- ・ア「話す必要はない」は言い過ぎ。ウ「気まずさ」は本文にない。エ「言葉より必ず優れる」も言い過ぎ。

3 問5 (5点)

ウ

「適切でないもの」を選ぶ。

- ・ア: 冒頭で「わかりやすく話しなさい」という一般的な教えを示し、「しかし」で疑問を提示 → 適切
- ・イ: 「友人が悩みを打ち明けてきたとき」の例で読者に考えさせている → 適切
- ・ウ: 本文に統計や調査のデータは示されていない → **不適切**
- ・エ: 「速いわかりやすさ」「遅いわかりやすさ」という対比で主張を整理 → 適切

3 問6 (5点)

エ

最終段落「わかりやすく話すことは、これからも大切である。ただ、その『わかりやすさ』が、だれのためのものなのかを…考えてみたい」「相手のために言葉を探す時間を…大切にしてもよいのではないだろうか」が主張。

- ・エ が最も近い。
- ・ア は「わかりやすさは不要」で言い過ぎ。イ は本文と逆。ウ は「沈黙のほうが優れる」で言い過ぎ。

4 問1 (4点)

おわしけれ

「おはしけれ」の「は」は語頭以外のハ行なので、現代仮名遣いでは「わ」に直す。

- ・おはしけれ → おわしけれ

採点ポイント: 語頭の「お」は変えない。「けれ」はそのまま。

4 問2 (4点)

ウ

法師は、ふもとの極楽寺・高良などを拝んで「これだけのものだ (かばかり)」と思いこみ、山の上にある本当の石清水八幡宮を拝まずに帰った。

- ・ウ が正しい。
- ・ア「石清水はない」、イ「山は関係ない場所」、エ「もう一度来る」は本文と合わない。

4 問3 (4点)

(例) 神へ参ることが本来の目的だ (13字)

正答例:

- ・(例1) 神へ参ることが本来の目的だ (13字)
- ・(例2) 神にお参りすることこそが目的だ (15字)
- ・(例3) 山に登るより神へ参るのが本意だ (15字)

本文「神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」が根拠。「本意」＝本来の目的。

採点: 「神へ参る」(2点) + 「本来の目的 (本意) だ」(2点)。字数外は0点。

4 問4 (4点)

イ

③「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」＝ちょっとしたことでも、その道の案内役（先達）はいてほしい。

・法師は案内役なしに一人で行ったために、本当の目的地を知らずに帰ってしまった。作者はそこから、案内役や経験者の助言の大切さを述べている → イ。

・ア「一人で行くべき」は逆。ウ「参詣は無意味」、エ「満足すればよい」は本文の教訓と合わない。